

刊夕日六十月五

# 常磐毎日新聞

定価 一月五元 三月十五元 半年三十元 一年六十元  
 発行所 常磐毎日新聞社  
 印刷所 常磐毎日新聞印刷部

## 歸依三寶の宗教

眞經 雲山

佛教は歸依三寶といふことを先づ以て教へる。それが佛教の序論であり、結論でもある。

お經の初めにも法要の初めにも三歸戒の無いといふ法はない。眞宗や浄土宗は「三歸戒」の名によつては現はれてゐないが歸命無量壽如來といひ讚佛偈といふのが矢張り佛に歸依することに外ならぬ。

三寶とは佛法僧である。歸依とは梵語南無の譯語であつて身も心も佛様に捧げ切ることである。ところが私たちが口先では南無〃〃〃と言つてゐながらその實何んにも捧げてゐぬ、捧げるところか、我れといふものを命がけで握つてゐて反對に御利益を下され杯と慾なことを要求してゐる、これでは如何に口先で南無〃〃を繰り返してゐても如實に佛に南無し得る時はない。佛に南無し切らぬ限り生死をはなれ悟りの開ける日とはない。

である。この故に南無野迦牟尼佛といふ。

法とは道であり、真理である。妙法とは妙なる法で思慮も言葉も及ばぬゆゑ己むを得ず妙法といふ。浄土門では佛の境涯は凡夫の淺智慧にては如何とも思議することが出来ぬゆゑ、南無不可思議光如來といひ何とか今一息その本質を表現せんものとして盡十方無礙光如來といひ、無量壽無量光如來といひ、その梵語が阿彌陀佛である、阿彌陀様の内容が無量壽無量光だと聞かされても壽命定まりありて光明なきわれ〃〃には矢張り思ひ議することは出来ぬ。たゞ不思議〃〃といふの外は思慮も言葉も及ばぬ点において妙法と不可思議光佛とは同義である。禪に謂はゆる大悟徹底とは、法性眞如に體達したことであつてその法性眞如とは離言絶慮の境涯であり、凡智の能く測るべきでないも眞如が前物を化する点において、それはまことに妙法といふの外なく凡智を以てそれを人格化して考へるとき、それはまことに佛である。

本來、佛とは固定したる死物ではない死者を佛といひ親が死んで佛になつたといふのは、眞如の本質に還歸したる人格に對する尊様である。同時に死者を佛と見るべきことわりもある。既に眞如に還歸して如來の大覺に入り前物を化するものである以上、理として讚美し祝福すべきであるも當然の人情として悲愁とならざるを得ないのである。

眞如を法身佛と見、そのはたらきを報身佛と見、そのはたらきの具體的方便の一として地上は化現したのを應身佛と見るのである。何れにしても、佛とは固定物ではなく、「はたらき」であり、その「はたらき」の弘誓を本願といひそのはたらきの力を本願力といふ。

凡夫がその「はたらき」を肉身に體得したときそれは本願力に攝取されたのである。攝取すること無くば本願といふも詮なく、この故に本願力の本質は攝取不捨である。何人も本願力に攝取されてゐないものは無いのであるが、攝取不捨のことわりを體得したものだけが本願力に救はれる結果となるのである。

三寶歸依のうち僧の話になると近頃の坊さんの内には可なり如何はしいのもあるので御同様にさゝか閉口の段となるも、僧とは破戒坊主のことではなく、僧とは梵語「僧伽耶」であつて譯して和合衆となり完全なる社會の集團生活といふことである。

に生きることを宗教の結論であり、それは三寶に歸依することにより得られる三歸の實なくんば成佛は叶はない「ナムカラタシノウ」といふも譯すれば「歸依三寶」であり、尊勝陀羅尼の劈頭に「ノウボバギヤバタイ」とあるのも最尊に歸依せよである。佛教とは歸依三寶によつて成佛の道を開いたものである。

に生きることを宗教の結論であり、それは三寶に歸依することにより得られる三歸の實なくんば成佛は叶はない「ナムカラタシノウ」といふも譯すれば「歸依三寶」であり、尊勝陀羅尼の劈頭に「ノウボバギヤバタイ」とあるのも最尊に歸依せよである。佛教とは歸依三寶によつて成佛の道を開いたものである。

專 門  
 産 婦 科  
 人 科  
 柳 病 科  
 花 柳 病 科  
 ◎入院隨意

井 坂 醫 院  
 平町田町 電話五五九番

中村齒醫科  
 平町 鍛冶町七

看護婦急派  
 の求めに應  
 じます  
 平町南町  
 平看護婦會  
 電話三〇七番

改稱御知らせ  
 新藤屋(支店)改め  
 鐵道省御指定  
 旅館 甲陽館  
 店主 武田 コウ  
 平町驛前電話一四八番

外科  
 專 門  
 科 線 X  
 上田外科病院  
 平町南町  
 電話一二九番

セメント  
 壁用材料  
 コールタール  
 ペンキ塗料  
 板ガラス  
 磐城セメント株式會社  
 代理店 西村屋藥舗  
 平町二丁目 電話三

ウニヤキ  
 貝焼  
 産土  
 魚問屋  
 最優最良 日本生本 命代平 代理店 榮盛  
 志賀 目丁四 平 (三一二電)

### 本郡から採用された

## 満洲國武装移民

### 福島聯隊區から六名發表

既報過般郡下各町村より募集せる満洲國武装移民採用には多數の希望者を見たが今回福島聯隊區に於て嚴選の結果左記六氏が合格した

好間大和田芳保 夏井大和田傳 平窪丹野基平 豊間永山喜太郎 四倉阿部金七

### 届出十七名

大工町から立候補した多田井笑次郎氏は十六日立候補届をなしたが十六日迄の届出は都合十七名となつた

## 市内各校の保護者會總會

各校の評議員を選挙

既報平町小學校保護者會の總會は十五日午後二時より第三小學校講堂に於て開き決算報告其の他種々協議をなし後本年度各校の評議員を選挙したが當選者は左の如く尙出席者は二百餘名にて頗る盛會であつた

太郎 堀江新太郎 長瀬昌平 高木喬 永山勇吉 上田耕作 正木貞二郎 永島磯惣太 鈴木康 大嶺庫 緑川喜三郎 木村浩 宍戸正勝 麻原吉五郎 吉田喜代治 石川友次郎 關内正一 端山正男 中島十藏 大和田郡司 吉田五平 (第三)井上貞治郎 諸橋元三郎 佐藤榮吉 猪狩觀徳 橋久左衛門 鈴木市造 木村淳 田中繁雄 橋源次郎 鈴木光吉 木村寅次郎 多田井笑次郎 草野七五三之助 諸橋政治 (第二)星野市造 鈴木

### 出場頭數二千餘に及んでる

## 美友會の賞状授與式

兒童成績展覽會 磐城中等學校X會及び美友會にては本日午後二時より去る五日催した郡下各小學校兒童成績展覽會の賞状及び賞品授與式を行ひ平第一小學校に對しては學校賞を平第二小學校桐谷ツネに對して個人賞を各授與した

## 大浦農倉の定期販賣安値

石城販賣利用組合大浦農倉庫の定期共同販賣は昨十五日行はれ五等五十七俵等外二百八十八俵合計三百四十五俵を入札の結果四等建値八圓二十錢で四倉町の渡邊留五郎氏に落札されたが去る五日の前回に比較すると一俵に付二錢五厘の下落を見た

## 三等機關士講習會開催

石城郡小名濱町縣立水産試験場では来る十七日より來月六日迄發動機船三等機關士の講習會を開催する

## 國松氏の息

### 諸橋鐵彌醫博開業

少壯有爲の外科専門醫

平町新川町諸橋國松氏三男醫學博士鐵彌(三)氏は十七日から同町に外科専門醫院を開設する事になつたが鐵彌氏は警中第十七回の首席卒業で第二高校から帝大醫學部に入り十四年卒業

### 科界の大斗北海道室蘭市田

## 眼と齒検査

成績は比較的良好 平第一第二兩小學校にては此の程全校兒童に對し眼及び齒の検査を行つたが結果は左の如く例年よりは幾分良い方である

△第一小學校(一五六二人) (眼)近視一〇六ト (齒)七二八 其他一

△第二小學校(一六二四人) (眼)近視一〇六ト (齒)七二八 其他一

## 關西の旅から

【御所—叡山—石山寺—三井寺】午前七時四十分宿舎出發。朝の京の町を元氣よく通つて廣い公園の様な廣場に出る。此所が御所で左手に見えるのは蛤御門である。樹木蒼然とし森嚴

胸に接る。九時十五分ケールカーで叡山へ登る。カーは一面霞に包まれた京の街を見下して一路上へ上へ此所は四明ヶ嶽。雲の海は足下にひろがりて遙か天に連る雄大壯麗眞に天下の絶觀なり。再びケールカーの人となり坂本に到着して日吉神社へ參る。朱塗の樓門特に目を引く。それより坂本港から琵琶湖へ乗出す渺々たる水面油を流せる如く廣がりて大海の如し。船の進むにつれ湖畔のバナラマは千變萬化に變化して行く……。フィルムは次第に變化して船はなほも進んで行く……。午後二時汽船を下りて石山寺へ。大石のごろ／＼と横はるのも其の名に相應しい。三時半大津へ到着。旅館へ行つて直ちに三井寺へ。有名な三井寺の晩鐘がしつかりと構へてゐる。皆旅へ歸つた。我々にとつて深い印象を與へた。今日の旅行果して今後の夢に如何な影響をあたへるか? 國分 董記

父康儀豫て病氣療養中の處養生不相叶十五日午後零時五十五分死去仕候に付此段生前の辱知諸彦に謹告仕候也  
追て送葬の儀は十八日午後二時出棺松堂院に於て佛葬相替可申候  
昭和八年五月十五日  
平町宇田町一番地  
親戚總代 加藤正保 加藤正保 藤丈夫 眞木正之

會葬御禮  
昭和八年五月十六日  
湯本町 男 柏木 同 親戚 同 哲諒

# 鯉群の漁場調査に

## 愈々磐城丸出動

### 小名濱出帆は十九日未明

#### 船具の手入れに忙殺

本縣水産試験船磐城丸は船体の修理もなつて此の程横濱ドックから小名濱に歸港したが愈々十九日未明小名濱港を出帆、八丈島から野島岬沖合へ鯉群の漁場調査に向ふので目下出帆準備に全員は忙殺されてゐる目下のところ磐城丸からは一隻も鯉船は出漁してゐないが磐城丸からの無電報告によつて一齊に出漁に出かけるものと見られるのでそれ迄各鯉船は一切の準備をととのいて待つてゐる

#### 娘を喰ひもの

#### 繼父に説諭願

平町番匠町日雇業イサ長女茂野イチ(こ)は目下石城郡四倉町旅館海氣館事豊田美孝方に女中奉公して居るが同人の實父が昨年死亡したので母親は繼父を迎へた處繼父は再三海氣館でイチに金の無心をし最近では吉原に二千圓で賣るのだと同人を連出さんとしたのでイチは十四日雇主と平署に出頭して繼父の説諭方を願出た

### 旅費にもならず

## 滞納金の整理

#### 濱木炭組合弱り切る

解散決議も縣の認めるところとならず全くデレンマに陥つてゐる濱三郡木炭同業組合では何れにしても組合費の滞納整理をいそがねばならぬ事になり年度替り早々から江尻組合理事は草鞋履きで各郡下に出張過年度賦課金並に八年度の組合費徴収に大奮となつてゐるが整理される金額は全く微々たるもので出張旅費にも當

#### 修養園講習會

明十七日第二校で修養園講習會は明日午前九時より平第二小學校講堂に於て青沼平町長主催のり會を初め我直治、津田達造、赤津千里の各小學校長及び吉田庄太郎氏後援の下に開催されるが講師は本部

理事竹内浦次先生であると

#### 二十三夜尊

#### 堂宇上棟式

平町に一名所十五丁目にある二十三夜尊堂宇は腐朽甚だしいので改築する事になり此の

### 垂れた高壓線

## 少年無慘の死

#### 遊戯中にこの椿事

石城郡植田町字岩間阿部彌衛三男正(こ)は十三日午後二時頃自宅附近の空地で遊戯中同所に架設されてある植田電氣の三五〇〇ボルト高壓線が切斷されてあるのを右手で掴んだ爲め感電即死これを發見救助せんとした隣家の阿部福太郎も一聞位近寄るや感電仰向に打倒された

### 柏木清七氏

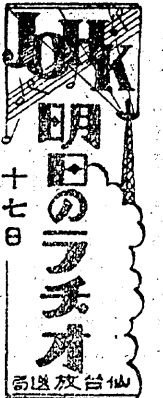
#### 地方稀に見る盛儀

同業磐城新聞主筆柏木哲氏殿父清七氏の葬儀は十六日午後二時自宅出棺同町德行院に於て佛式により營まれたが會葬者は比佐、鈴木各代議士の外八百餘名に及び地方稀に見る盛儀であつた

### 平第二の朝起きの歌

今夏全生徒に歌はしめる……歌を教授する事になつたと勵の爲め今夏休み中一日より十日間朝起會を催す事になつたので之に先立ち全校児童に對し左の如き朝起の

歌を教授する事になつたと  
一、起きよと人に呼ばれ  
ぬ先に  
とくく起きよはね起  
きよ



今夜は北西の風晴曇相半し明日は南西の風一時曇

### 明日の部

後八、三〇 小唄 山榮丸  
後八、五〇 ラヂオレヴエ  
「眞夏の夜の夢」(抄演森の場) ウイリアムシ  
エクスピア原作 松竹少年歌劇文藝部脚色  
後九、三〇 時報 ニュー  
ス 氣象通報 番組豫告

### 好問青訓生

赤井嶽で戰闘教練  
石城郡好問村青年訓練所生徒五十餘名は来る廿日午前七時同村小學校を出發赤井嶽に登山山嶽に於ける戰闘教練を行ふと

### 野犬にかまれ

#### 泥酔した行商人重傷

十三日付を以つて許可の指令に接した  
長橋町醬油醸造業關内半平氏祖母トク嬢は永らく病氣中の處此の程逝去し本日午後二時性源寺に於て葬儀執行盛儀であつた享年八十五

### 川前村で

#### 新に産業組合設立

石城郡川前村では豫てより産業組合の設立を計るべく有志間で運動中の處最近同村永山條介外三百八十八名の組合員に依つて組織され縣に申請中であつたが去る

### 詐欺事件公判

既報  
双葉郡浪江町大字權現堂宇上續町十七番地果物商前科三犯西坂得藏(こ)に對する詐欺事件の公判は本日午前十時より平區裁判所に於て

### 砂防工事

#### 十六日から施行

小川江筋組合では小川村下小川並に平窪村地内に於ける江筋の繼續砂防工事を十六日から施行したが工費は約六千圓で數年に亘る繼續砂防工事はこれが完成によつて打切りとなる

### 小麥加工講習

#### 神谷分場で開く

石城郡神谷村農事試験分場では来る廿四廿五の兩日同所に於いて小麥需要加工の講習會を催すが講師は農林省技手小林正一郎氏及び陸軍々糧米分所一等主計阿久津正藏の兩氏であると

實況(六日)國技館より  
後六、〇〇 子供の時局  
お話「古今第一の横綱谷風」三原良吉  
後六、二五 ことばの講座  
「ことばの正しい読みかた話しかた」神保格  
後七、三〇 講演「曠古の英雄豊臣秀吉を偲びて」  
神宮皇學館教授若山善三郎  
後八、〇〇 漫談「話術」  
立花實  
後八、二〇 哥澤 哥澤芝  
勢以社中  
後八、三五 絃曲「望月」中  
平福之都外  
後九、〇〇 義太夫

# 業来新吉

【禁轉載上演及映畫】

悟道軒圓玉演  
近藤紫雲畫  
上田馬之助

第三百三十九號

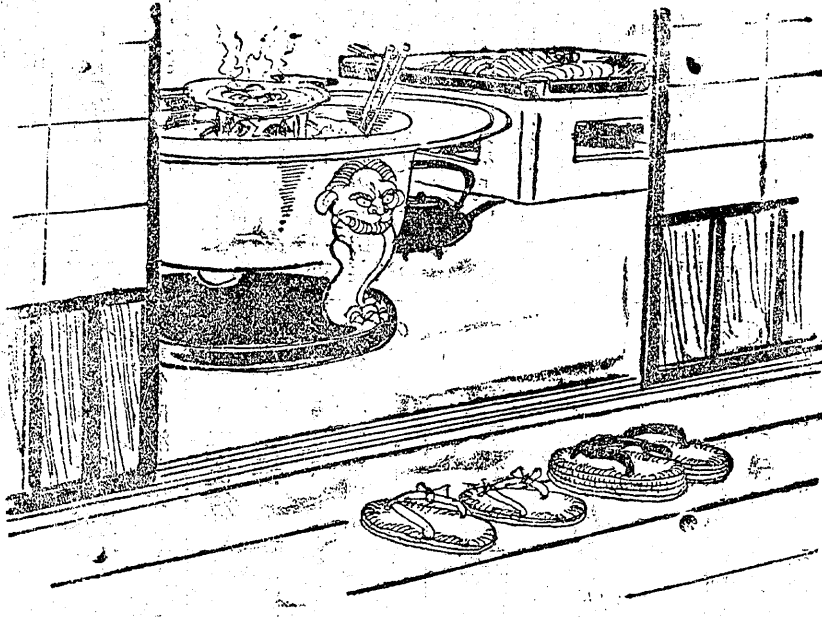
道樂を文中に修業

文中は上田から二百兩受  
取つて

文「確にお預り申したて  
の金をなくすまでには新三  
郎様を堅くして御覽に入れ  
ます」

馬「それで不足であればま  
だ二百兩位は出るぞ」

文「足りない時は貴下にお  
願ひ申して呼び金をして頂  
きますが、先づこれが煙に  
なります迄には新三郎様に  
人らしい魂を入れることも  
出来ませう、しかし旦那貴  
下のお金は面白くない、通  
人とは貴下のごとでござい  
ませう毒を以つて毒を制す  
とは是れだらうと存じます  
道樂をしてゐる中は其道に  
迷つてゐることゝていくら  
意見をしたとて聞き入れる  
譯がございませぬ、それで  
すからそんな時は意見をせ  
ずドシ／＼遊ばして其道の  
極意に渡ると遊びが面白  
くなります、従つて彼の廓の  
悪い處が目につきます迷つ  
てゐる時は其の悪い事が目  
につきませぬ、宜い事はか  
り見えます、古い都々逸、  
ほれた目で見りやあはたも  
笑くば……うまい事を云  
ひますね、これは只聞



居れば何の味もない様に思  
ひますがさしてしりぞいて考  
へるとこれは人情をうがつ  
てゐます、何しろ今新三郎  
様は迷つてゐますからどん  
な意見をすればとて風が吹  
いて来たとも思ひませぬ、

ならぬ」  
文「御尤も様でございます  
先づ茲半年か三月の間には  
生れ變つた様な人間にして  
御覽に入れます  
馬「旨くやつてくれ、さア  
さもう云ふ處はない悠然飲  
んでくれ」  
とこれから遠ざけて置い  
た女中を呼びよせて其の酌  
で盃を揚げたが夕方向島を  
出て竹屋の渡船で山谷堀へ  
來まして、あれから吉原に  
行き佐野権に遊び居る新三  
郎と共に上田は散々遊んで  
翌朝かへつたが直ぐに新三  
郎の養父緒方善右衛門の許

廓に遊ばして置きますこれ  
は身持を堅固にいたす一つ  
の方便」  
善「ウームそれは不思議だ  
な彼んな汚れた場所に置い  
ては益々心は汚くなるだら  
うと思ふが」  
馬「ヤそんな御心配は御  
無用、今一層道樂者に仕立  
てますその教育をいたす者  
は幫間の文中でございます  
それに就いてお預り申した  
二百兩は文中に渡して置き  
ました、あの金がなくなる  
迄には堅くなると思ひま  
すが若し入用に不足を感  
じました時はもう二百兩も  
出して頂きます」  
善「それは大變だ、新三  
郎の爲に身代を振ひ落して  
しまふ」  
馬「しかし一人は金で求  
める事は出来ませぬ新三郎  
殿が人らしくなれば世の爲  
にもなります」  
と云つたが善右衛門はか  
う入費がかつては堪へ難  
いと愚痴を云つた、これか  
ら上田は折々吉原へ來て文  
中に會ひ

馬「どうだ文中新三郎殿の  
様子に變つた處はないか」  
文「ヘエ天分道樂に油が乗  
つて來ました、今が面白い  
眞盛りこれが過ぎると嫌氣  
がさします、其處まで持つ  
て行くまでが却々金がかゝ  
ります」  
馬「金のかゝるは宜いが眞  
人間に叩き直してくれ」  
文「心得て居りますよ、先  
づ氣を長くしてお待ちくだ  
さい」  
とこんな事を云つてゐた

に來た  
馬「新三郎殿は當分當家に  
は歸りませぬ、これは念の  
ため申しておきます」  
善「郎に歸らんとすればや  
はり吉原に居るかな」  
馬「左様哉、あまり彼を

まア／＼堅くするには此の  
上にも放蕩をさせるが妙業  
あなただのお考へなされた事  
は至極結構」  
馬「宜敷頼む只今も申した  
通り新三郎殿は先殿の御胤  
であるから堅くいたさね

が或る時文中が新三郎に  
文「若し其の遊んで居て  
はお邸へ歸る事は出来ませ  
ない、何うです當分吉原の  
子におなりなすつては」  
新「ウームそれも宜からう親  
父の許に歸ると幸に入つた  
様な心地がする」  
文「それでは此の吉原にお  
在なさい花魁も貴下に一日  
でも別れるのがつらいと申  
して居りますから、此の廓  
に貴下のお腰の据る様に私  
が一つ骨を折ります」  
イヤこれを聞いて新三郎  
大喜び

懸賞尋不自轉車  
一臺  
弊店名義新品車  
福島縣一〇四、二八〇番  
鑑札番號 平 六、九四一  
右新品自轉車ハ去ル三月二十二日購入セシガ、四月  
八日以來行衛不明トナリシ故、發見御知ラセ下サレ  
シ方ニハ懸賞金五圓也。御届ケ下サレシ方ニハドナ  
タニ不拘金拾圓也ノ懸賞金ヲ差上ゲマス。  
平町三丁目北裏(元郵便局裏通り)



共榮漆器店

市原醫院  
平町 田町  
電話一四四番

外科 X光線科  
性病科  
平町 田町

安齊外科醫院  
電話四七五番

吉田眼科病院  
平町屋町、電話六八番

耳鼻咽喉科専門  
大和田醫院  
平町南町  
電話一〇七

お醬油は……ヤマフル

醬油味噌  
たひら 正宗  
鯉節 食料品

山崎合名會社  
福島縣平町(電話營業部)醸造工場  
明治生命磐城代理店 山崎與三郎